

をきし給ひては益々更衣をはやく女御とだに上はせられざりしを悔み給ひて大納言が遺言の如く入内させたるに就いてその喜び即返禮はかひある様にと思ひしを今はいかにもせんすべなし。せめては若宮など成人しなば、祖母に對して相應の報いもすべし。命長くて待つこそよからめなどのたまふとなり。

あひいで は成長のことをいふ。

かのおくりもの御覽せさす。なき人のすみかたづねいでたりけん、しるしのかんざしならましかばとおもほすもいとかひなし。

大意 母より命婦へ贈りたる彼の形見の品を御覽するに唐土の故事を想ひ出て給ふも、此の形見は、故更衣手渡し品の品にあらざれば又甲斐なしと思し召さるとなり。

なき人のすみか尋ね出てたりけん とは朝夕誦んじ給へる長恨歌中の故事、温「臨邛の道士鴻都の客、能く精誠を以て魂魄を致す、君王展隙の思を感ぜしめんが爲に、遂に方士をして懸懸に究めしむ云々唯舊物を將て深情を表はす、鈿

合金釵寄せ將て去らしむ、釵は一服を留め、合は一扇釵は黄金を撃き合は鈿を分つ、但心をして金鈿の堅に似しむ云々』とあるをいへるなり。
たづねゆく、まぼろしもがなつてにても、
たまのありかを、そことしるべし。

歌意 幻術を行ふ人もあれかし、それを傳にしても更衣の靈のありどころだに、しらはやと御門のよみ給へる歌なり。

まぼろし は、幻にて即方士をいふものなり。

ゑにかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆かぎりありければいとほひすくなし。太液の芙蓉、未央の柳も、けにかよひたりしかたちを、からめいたるよろひは、うるはしうこそありけめ、なつかしくらうたげなりしを、おぼしいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。あさゆふのことぐさにも、羽をならべ枝をかはさんと、ちきらせ給ひしに、かなはざりけるいのちのほどぞ、つきせすうらめしき。

大意 繪に寫したる楊貴妃の顔は、巧なる畫工の筆に成れると雖も、と筆に限

りあるものなれば、かな／＼實の形容には及ばず、又太液の芙蓉、未央の柳、或は揚貴妃の顔に似たるも、その裝束の唐めきて吾が國風ならねば、さしてなつかしども見えぬ。従て御門は唯更衣の實の顔こそ見まほしけれ。麗はしき花の匂ひも珍らしき鳥の音も比ふべきにあらざると悲み給ふ。あはれ昔は朝夕の戯にさへ比翼の鳥とやらならん。連理の枝とやらならんと契りしものを、まゝならぬ人の命こそよなくうらめしけれとなり。

太液の芙蓉、未央の柳とは、長恨歌にいふところ、其の下の句に、芙蓉は面の如く柳は眉の如しとあり。太液は唐の池の名、未央は玄宗皇帝の宮殿の名なり。けにかよひたりしかたちとは、氣色容躰の似通ひたるをいふ。

花鳥の色にも音にもとは、彼の美人揚貴妃は猶ほ太液の芙蓉、未央の柳にもたとへられしが、更衣は、左様にたとふべき物もなくすぐれたりしこのころなり。

羽をならべ枝をかへさんとは、長恨歌に、謂はゆる、天に在つては願くは比翼の鳥とやらん地に在つては願くは連理の枝とやらんなり。

風のおと虫のねにつけも、物のみかなしうおぼさるゝに、弘徽殿には、久しう上の御局にもまうのほり給はず、月のおもしろきに夜ふくるまで、あそびをぞし給ふなる。いとすさまじう、ものしどきこしめす。此の頃の御けしきを見奉る、うへ女房などは、かたはらいたしどき／＼けり、いとあしたかど／＼しき所、ものし給ふ御かたにて、ことにもあらずおぼしけちてもてなし給ふなるべし。

大意 御門は風の音、虫の聲につけても戀慕の情のみ起し給ふを弘徽殿には久しう知らず顔にて、月の面白きを機會として夜の更くるまで管絃の御遊びあるを御門は如何なる御心にて聞き給ふらん、殿上人の多くは時宜に叶はざるを片腹痛しと思ひたりとなり。

上の御局 とは御門の所の御座所なる清涼殿中の一室なり。
まうのほり給はずとは、參上し給はずといはむがごとし。
すさまじうとは、俗にいふ不用らしくのこゝろなり。

ものしどきこしめすとは、厭はしく氣障りにし給ふこゝろなり。
かど／＼しきとは、心にかどありて意地わるきをいへるなり。

けちては消して、もてなしはふるまひなり。
月もいりぬ

雲のうへもなみだに、くるゝ秋の月

いかですむらん、あさちふのやど。

これ御門の歌はせたまふどころ、其の大意は雲の月上にありてだに涙にくるゝ月なればあさちふの宿にては月影はいかに清むらんさだめて涙にくるゝならんとなり。

おぼしやりつゝ、どもし火をかゝげつくして、おきおはします。右近のつかさの、どのまうしの聲聞ゆるは、うしになりぬるなるべし。人めをおぼして、よるのあとにいらせ給ひても、まどろませ給ふことかたし。

大意 右の歌、獨りごちつゝ燈火をかゝげつくして尙ほ寝に就き給はず、やがて丑の刻を以て行へる右近衛府のどのまうしの聲を聞き給ひて、人めを思し召し御寝間には入り給ひしも容易にまどろませ給はずとなり。
右近のつかさのどのまうしとは、右近衛府にて直宿の武官等が各、名をな

のり申すことなり、毎夜丑の刻に於てこれを行ふ。御門其の聲をきこしめして、夜の更けたるを知り給ひしどの意なり。

あしたに起きさせ給ふとても、あくるもしらで、とおもほしいづるにも、なほ朝まつりごとは、怠らせ給ひぬべか、めりものなどもきこしめさず、あさがれひのけしきばかり、ふれさせ給ひて、大床子の御ものなどは、いどはるかにおぼしめしたれば、陪膳にさふらふ限りは、こゝろぐるしき御けしを見奉りなげく、すべて近うさふらふ限りは、をどこ女、いどわりなきわざかな、といひあはせつゝなげく。

大意 朝早く起き給ひても、御膳の物などは、箸さへ取り給はざれば陪膳の人々の其の御心を察し奉るものは、勿論其他御側に侍る男女は、皆いど不憚なることかなとてなげき合へりとなり。

あさまつりごど云々 は、長恨歌に謂はゆる、春宵短を著みで日高くして起く、是より君王早朝せずとあり、こゝには更衣の御歎きに政事の方は怠らせ給ふをいふなり。

あさがれひ は朝飯。

大床子 は御食物を盛る臺。御ものは御膳物なり。

わりなきわざ とは、俗に云ふ、よきなきことに同じ。

さるべき契りこそはあはしやしけむ。そこらの人のそしりうらみをも、は々からせ給はず。この御事にふれたることをば、道理をも失はせ給ひ奉けたかく世の事をもおぼしめてたるやうになりゆくは、いとたいくしきわざなり。と人のみかどのためしまでひきいでつゝ、さゝめきなげきけり。

大意 或は更衣どの御縁は、前世よりの約束にやありけん。數多の人の毀りも厭ひ給はず、既に道ならぬ事あるに、今尙ほ更衣の失せて後にも、かく世の中の事を忘れたるやう見られ給ふは、げに横ざまなることかななどいひ、唐の玄宗の例をも引き來りて、噺しなげきたりとなり。

たいくし は忘々の字音にて、其の意文字のごとし。

ひとのみかどのためし とは、他朝の例、即唐の玄宗の楊貴妃を戀慕したる例なり。

國文學畢

チは高シ

14
227

終